

一一ノ九、牛玉宝印寄付状

出典 笠置寺所蔵の現本

解説 十一面観音悔過の法要は天平勝宝四年に笠置寺で初めて行われたが、その後廃絶した。これを嘆いた東大寺勸進沙門庸訓が笠置寺多聞院光専とはかり、庸訓の先達、公慶上人（治承、永祿の戦火で焼け落ちていた大仏殿の再建を実現させた勸進僧）の志を体し、師の護持せる神符たる正月堂牛玉宝印（ゴウホウイン）と庸訓の弟子である秀節が造った十一面観音を笠置寺に寄付し、この法要の再興を図ったもの。正月堂牛玉宝印と庸訓の書になる「普門示現」（観音経の一節）が今も笠置寺に伝えられている。なお秀節の十一面観世音菩薩は現在舍利殿に安置されている。

牛の胆嚢にできる石が漢方薬の牛黄でこれが牛玉である。東大寺ではお水取りの際にこの牛玉宝印の札を刷って修二会満行まで秘仏の十一面観世音菩薩に祈願する。

原典

寄附状之事

正月堂牛玉宝印一枚

右往昔正月堂行法加持牛玉宝印也、依有由緒当寺伝来、元祖公慶上人所護持也、今般正月堂本尊并牛玉宝印、其寺令寄附之畢、尤可被為鎮護国家寺運栄曜之基者也

造東大寺大勸進上人

庸訓

元文三年八月

笠置寺衆徒中

読み下し文

寄附状の事

正月堂牛玉宝印（注一）一枚

右は往昔正月堂にて行法加持せる牛玉宝印也、由緒有るに依って当寺に伝来し、元祖公慶上人（注二）護持する所也、今般正月堂本尊并牛玉宝印を其寺に之を寄附せしめ畢んぬ。尤も鎮護国家、寺運栄曜の基となさるべき者也

造東大寺大勸進上人

庸訓（注三）

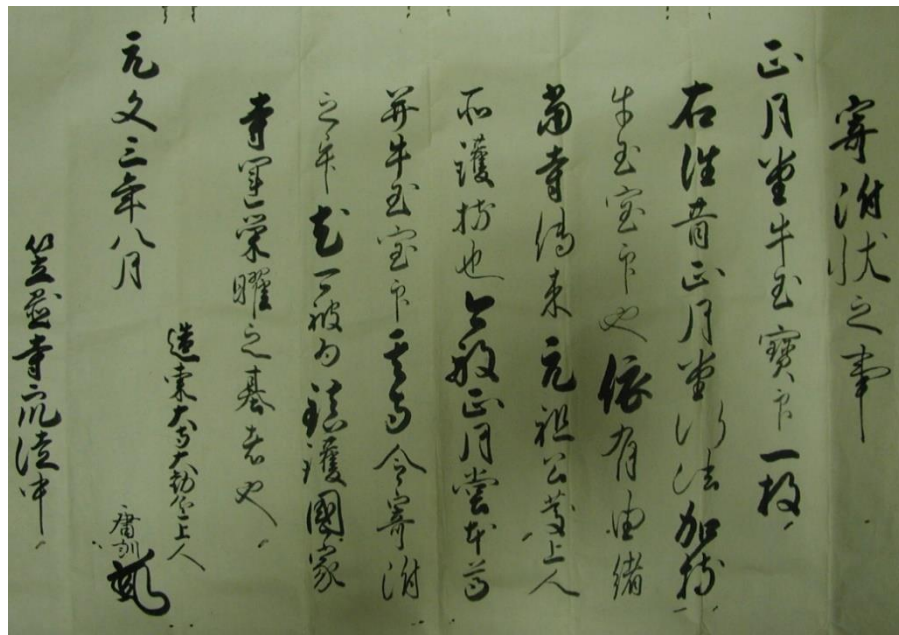
元文三年（一七三八年）八月

笠置寺衆徒中

注一、牛玉と書くが「ゴウ」と読む。東大寺で修二会のとくに配るお守り。

注二、江戸時代において東大寺大仏殿を再興した東大寺大勧進。大仏殿は永禄十年（一五六七年）の三好三人衆と松永久秀との兵火で焼亡して以来、江戸時代になるも復興ならなかった。ここに貞享元年（一六八四年）公慶は大仏殿再興を志し、行基、重源の先例にならって畿内を勧進して大仏殿再建に奔走した。大仏殿の落慶供養は公慶の死後、宝永六年（一七〇九年）に行なわれた。

注三、大勧進とは大寺院の造営修理に対して勅許を得て任命される僧。東大寺においては江戸時代になつて大仏殿の再建に努力したのは公慶上人であつた。以後大勧進は公盛、公俊、庸訓と代々受け継がれ、この牛玉宝印が笠置寺に寄付された元文三年は庸訓の手により江戸時代における大仏殿再建事業の殆どが終わつた年であつた。なお庸訓が大勧進であつたのは享保十三年から寛保元年（一七四一年）まで。



造東大寺大勧進上人庸訓の寄付状